

内閣府食品安全委員会
「第4回リスクコミュニケーション学習会」における話題
リスクコミュニケーションに関する意見と生協の取組み

日本生活協同組合連合会
品質保証本部 安全政策推進部
鬼武一夫

1. 生協の得意とする領域

例えば、消費者のフードチェーンへの理解が必要という観点から言うと、全国的に『食・商品』の活動は盛んに取り組んでいる。

2. リスクコミュニケーションの定義から重要な視点

- ✓ 双方向型 (interactive, two way communication)
- ✓ リスクコミはリスクアナリシスの早い段階での関係者の関与
- ✓ 説得することではない

3. EU の取組み

- ✓ 欧州食品安全機関 (EFSA) はリスクコミュニケーションのガイドラインを公表 (2012 年)
- ✓ リスクアナリシス手法やテクニックが進展する中で、ドイツ連邦リスク評価研究所 (BfR) が作成したリスクプロファイルはわかりやすい (2014 年)

4. 食品安全行政の中で取組み強化

- ✓ 食品安全基本法が設定時から今日までの取組みをレビュー
- ✓ コミュニケーション戦略

- 別添資料
1. リスコミ関連 (EFSA, BfR, 日本生協連)
 2. 日本生協連としてのリスクコミュニケーションの取組み
 3. 国際的な食品の安全性確保のためのコミュニケーション



欧州食品安全機関(EFSA)、リスクコミュニケーションのガイドライン「食品が大騒ぎを起こすとき：リスクコミュニケーションに用いる実証済みレシピ」(2012年4月2日)

リスクコミュニケーションに関する EFSA のアドバイザリーグループによる序文

リスクコミュニケーションの究極のゴールは、利害関係者、消費者、一般市民がリスクに基づいた決定の背景にある論理的根拠を理解し、そのことによって彼ら自身の関心や価値観に関連した当面の課題について事実に基づく根拠を反映したバランスのとれた判断に到達することを助けることである。

リスクコミュニケーションは、リスクに関する耐容性または許容性というコミュニケータの判断について、人々を納得させるか説得する試みとみなされてはいけない。むしろ、人々がより情報を与えられたうえでの判断するのを援助し、彼らが自身が自分の一生で直面するリスクについて取り扱うことを可能にする試みである。

そのうえ、効果的リスクコミュニケーションは、リスク、特に食品リスクについての、最新の対話に積極的に参加するための中心的な特権をもつことである。

食品リスクについて十分な情報を得て承知していることは、規制及び基準をデザインし形作るためのより直接的な共同決定へ向けた最も重要な課題でもある。

効果的リスクコミュニケーションは、包括的で確実なリスク管理プログラムの成功への強い貢献をすることができます。

効果的リスクコミュニケーションを通して；(1) 人は、消費者が製品と関連したリスクに気づいていて、それによって問題なくそれを使うか、それを消費することを確実にする。

(2) 適切なリスクアセスメントと管理決定と関連するリスク/ベネフィット上の問題で住民の信頼度をつくることができる；(3) 食品のリスクの性質や食品を安全にするための基準についての一般の理解に関与する；(4) 公正かつ正確で適切な情報を提供することにより、消費者は自分自身の「リスク許容」基準に合致する多様な選択肢の中から自分がどうするかを選択することができる。

リスクコミュニケーションは、どのようにか以下の問題に対処する必要があります：

- 危害とリスク（危害とリスクの違いを強調する）に関して情報を市民に提供してください；
- リスクアセスメントを実行して、両方の仕事に関係するいろいろな関係者と手順の説明を含むリスク管理決定する方法について、情報を市民に提供してください；
- 効果的双方向型のコミュニケーションを組織してください；
- リスクアセスメントと管理プロセスにすべての関係者の信頼と信憑性を強化してください；
- 関係者をプロセスに巻き込んで、論争を解決してください。

このゴールに達するために、食品だけでないことによって、すべてのリスク領域にあてはまる4本の一般的なガイドラインがあります：

- あなた自身のリスクアセスメントとリスク管理パフォーマンスの批評的なチェックから始めてください。
- 評価プロセスの初めから消費者を含む最も重要な関係者と情報交換する連続努力を確実にする統合するようなリスクコミュニケーション・プログラムを設計してください。
- 対象とされた観衆の必要によって、そして、情報源の必要にでなくコミュニケーションを手直ししてください。
- フィードバックを集めて、価値と選択における変更を感じる組織化された努力において、コミュニケーション・プログラムを調節して、修正してください。

ここでのドキュメントは、食品セクターですべてのプロのリスクマネージャーとコミュニケータがこれらの一般的な必要条件に敏感でいろいろな観衆の必要に注意するコミュニケーション・プログラムを設計するのを助けることです。そのようなプログラムは、高品質科学的な入力ならびに一般の価値と選択の公平な表現を確実にする必要があります。

豊富な種類のコミュニケーションと利害関係者マニュアルが存在します。

Index

I. 序説と目的

II. 優れたリスクコミュニケーションを導く基本原則

- II. 1. 実践上の基本原則

III. コミュニケーションのレベル及び種類の選択を左右する諸要因

- III. 1. コミュニケーションの観点からのリスクのレベル
- III. 2. ハザード(危害要因)の特徴
- III. 3. だれ/何が影響を受けるのか?
- III. 4. ヒト/動物/植物/環境は、どのように影響を受けるのか?
- III. 5. ハザード/リスクへの暴露のレベル
- III. 6. リスクを管理する能力
- III. 7. リスク認知に関連するその他の諸要因
- III. 8. 必要とされるコミュニケーションのレベル

IV. ツールと伝達経路

- IV. 1. 報道機関への対応
- IV. 2. ウェブサイト
- IV. 3. 刊行物
- IV. 4. 電子刊行物
- IV. 5. 会合及び研究集会
- IV. 6. 意見募集
- IV. 7. 協力機関/利害関係団体のネットワーク
- IV. 8. ソーシャルネットワーク(Facebook や MySpace 等)
- IV. 9. ブログ
- IV. 10. 簡易ブログ(Twitter)

V. 経験から学んだこと

- V. 1. 動物クローニングに関する EFSA のリスク評価
- V. 2. 食品媒介性の人獣共通感染症に対するテーマを決めた EFSA の計画的コミュニケーション手法
- V. 3. 減塩キャンペーン
- V. 4. 特定の人工着色料の小児に対する影響を調べたサウサンプトン大学の調査
- V. 5. オランダにおける Q 熱：公開性と透明性
- V. 6. スウェーデンにおける栄養補助食品に関する症例の履歴
- V. 7. 事例研究：アイルランドのダイオキシンに係る緊急事態

参考文献

その他のガイドライン作成の取組例

ドイツ連邦リスク評価研究所(BfR) リスクプロファイル(2014年5月12日)
食品中の残留塩素酸に関する健康アセスメント

 BfR risk profile: Health assessment of chlorate residues in food Opinion No. 028/2014	
A Who is affected	General population Children, persons with hypothyroidism or iodine deficiency 
B Probability of health impairment resulting from Chlorate residues in food	Practically non-existent Unlikely Possible Likely Certain
C Severity of health impairments resulting from chlorate residues in food	No impairment Slight impairment [reversible] Moderately severe impairment [reversible/irreversible] Severe impairment [reversible/irreversible]
D Informative value of the available data	High: Essential data are available and free of contradictions Medium: Some essential data missing or contradictory Low: Large amounts of essential data missing or contradictory
E Controllability by consumers [1]	Control not necessary Controllable by taking precautionary measures Controllable by refraining from consumption Not controllable

Dark blue shaded fields designate the characteristics of the risk assessed in this opinion (more detailed information on this can be found in the text of the opinion).

生活の活動

食の活動

食品の安全



食にまつわる話題となったことを解説するQ&Aや、日本生活者の食に関する意見をなどを紹介しています。

食品のはてな? BOX



食品の色・においについてなど、生活に寄せられるご質問から、毎日のくらしに役立つ情報をQ&A形式で紹介しています。

たべる、たいせつ



全国各地の生活が取り巻く「食育」活動を紹介しています。

放射線物質問題への対応について

生活の電磁波はじまるせんか? 放射線計測はこちら

SNS公式アカウント

W [micro.groch](#) コープ食品

Facebook コープ食品

Facebook 健康文庫

こどもコーナー



ホームページのトップへ戻る

日本生協連としてのリスク コミュニケーションの取組み

内閣府食品安全委員会
第4回リスクコミュニケーション学習会

2014年9月24日
日本生活協同組合連合会
品質保証本部 安全政策推進部
鬼武一夫



FAO Food safety risk analysis (Factsheets) より

コーデックスにおけるリスクコミュニケーション

危害とリスク、リスクに関係する因子およびリスク認識に関して、リスク評価実施者、リスク管理実施者、消費者、産業界、学界およびその他の関係者の間の、リスク評価の所見についての説明およびリスク管理上の決定の基盤を含め、リスクアナリシスのプロセス全体を通じて情報および意見を**相互作用的に**交換すること。



リスクの認知に関する要素

リスクを感じやすい > リスクを感じにくい

- | | | |
|-------------|---|-----------|
| 情報が少ないもの | > | 情報が多いもの |
| ● 未知 or 新技術 | > | 既知技術 |
| 他人がコントロール | > | 自分がコントロール |
| 利益が不明 | > | 利益が明瞭 |
| 影響が不公平 | > | 影響が公平 |
| ● 合成物質 | > | 天然物質 |
| ● 子供への影響 | > | 大人への影響 |
| 破滅的 | > | 統計的 |

リスクコミュニケーションの要点

- 相互作用的に交換させること。
- リスクには科学的側面と感情的側面
 - 専門家は科学的側面に重きを置く。
 - 一般は感情的側面により大きな懸念を持つ。
- RCは常に明確な目標の設定が必要
- RCはリスクアナリシスのできるだけ早い段階で有意義な形で、外部の利害関係者に積極的に関与してもらう。

● 「食の安全・安心とリスクコミュニケーション」連続学習会を開催

コープとうきょう*では、安心して食べ続けるために食を取り巻くリスクを理解し、意見交換や相互理解を深めることを目的として、2012年7月～10月の毎月1回、計4回の「食の安全・安心とリスクコミュニケーション」連続学習会を開催しました。

各回でテーマを定め、大学、マスコミ、他団体などから講師を招いてリスクコミュニケーションを進めながら学習し、のべ323人が参加しました。参加者からは、「専門分野の方々からシリーズで話を聞き、食についての認識が高められました」「みんなで話し合うことの大切さを改めて感じました」などの声が寄せられました。

*現コープみらい



▲第1回学習会「リスクの正体を知ろう～放射線の影響と食の安全を考える」では、参加者同士で話し合いました。

● 政府にパブリックコメントを提出

行政機関が政策を立案する際、その政策案に対して広く消費者や事業者などから募集する意見・情報をパブリックコメントといい、行政はこれを考慮して最終的な意思決定を行います。日本生協連では、食品安全行政をよりよくするため、関連省庁が実施している意見募集に対して積極的に意見を提出するとともに、WEBサイトでお知らせしています。

日本生協連食品の安全 **検索**



クリック

▲食品の安全、消費者行政、環境など、くらしに関わるさまざまなテーマで、パブリックコメントを提出しています。



クリック



● 組合員リーダー向け「食品安全セミナー」を開催

日本生協連では、会員生協の組合員理事などのリーダー向けに、2008年から年2回、食品安全セミナーを開催しています。セミナーでは、食品表示制度やBSE対策など、食品の安全に関連するタイムリーなテーマをその都度設定し、各分野の専門家による講演やグループディスカッションを行います。食品の安全について、どう考え、行動していくかについて学習し、リーダーとして地域での活動に生かすためのものです。



▲2012年12月5日に開催した「食品安全セミナー」では、食品表示制度とBSE対策について学びました。

● 「食の安全・安心シンポジウム」を開催

2012年11月22日、内閣府食品安全委員会、滋賀県、滋賀県生協連が主催する「食の安全・安心シンポジウム」が開催されました。BSE問題の対策や食肉の生食、加熱不足による食中毒の発生が問題となっており、これらを受けて、「食肉を生で食べることのリスクを知ろう」をテーマとし、行政関係者、事業者、消費者などが参加しました。参加者からは、「生食ではないが、レアのステーキの安全性はどうか」「野生と家畜では、安全性の違いがあるか」「食品のリスクについて、学校教育の一環として組み入れてもらいたい」などの質問や意見が出され、活発な討論が行われました。

滋賀県生協連から2人がパネリストとして登壇しました。▶



● 県と協働で食品の安全に関する意見交換会を開催

群馬県生協連が参加する「ぐんま食の安全・安心県民ネットワーク^{*}」では、群馬県との協働事業として食品の安全に関する意見交換会「地域語り部の会」を開催しています。

2013年3月11日に行われた「第11回地域語り部の会」では、ヒトに対するさまざまなリスクについて理解を広げ、食の安全について考えてみようと、国立医薬品食品衛生研究所の畝山^{うねやま}智香子氏を講師に招き、「ほんとうの『食の安全』を考える～ゼロリスクという幻想～」と題する講演を聴きました。

^{*}「ぐんま食の安全・安心県民運動」の推進を目的に、2007年5月に設立された消費者、生産者、事業者15団体が参加するネットワークです。



▲消費者や事業者などが参加した「第11回地域語り部の会」の様子

各活動における組合員の参加状況



産地見学・交流
食育等の取り組み
30万1千人

食品の安全の学習
意見交換会
2万7千人

商品を囲んだパーティー
商品への参加の取り組み
38万人



平和のつどい
学習会等
32万7千人

ユニセフ
国際協力
4千人



子育てひろば
子育て学習会等
22万1千人

くらしの助け合い活動
ふれあいサロン活動等
7万1千人



消費者主体の社会作りの取り組み
1万7千人

くらしの見直し家計活動
1万9千人

被災地へのボランティア支援等
3万6千人

地域の防災の取り組み
5千人



節電・エコライフ活動等
25万8千人

環境・エネルギー問題学習
7千人

自然観察会
自然とふれあう活動
1万3千人



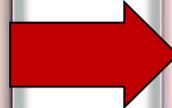
商品や食に関わる活動

生協名	企画名	内容
1	コープさっぽろ	食の安全 食セミナー
2	コープあおもり	食品の安全学習会
3	いわて生協	産地工場見学
4	みやぎ生協	5ADAY食育体験ツアー
5	生協共立社	食育(子ども・親子対象)
6	コープふくしま	食育(子ども・親子対象)
7	コープあいづ	コープ商品学習会
8	とちぎコープ	食の安全ネットワーク主催の学習会・講演会
9	コープぐんま	放射能・放射性物質に関する学習会
10	さいたまコープ	畑のがっこう里山
11	バルシステム埼玉	放射能物質による食品汚染への対応について
12	ちばコープ	食育プログラム
13	バルシステム千葉	産地産直
14	コープとうきょう	たべる*たいせつキッズクラブ
15	バルシステム東京	工場見学・委員会内部企画
16	東都生協	子どもの食に関する放射能学習会
17	コープかながわ	商品改善アンケート
18	バルシステム神奈川ゆめコープ	センター祭り
19	市民生協やまなし	合同リスコム委員会(ユ)
20	コープながの	食の安全学習会
21	新潟県総合生協	農業体験
22	コープにいがた	にいがた食の安全・安心を考える講演会
23	コープしずおか	放射線・放射性物質に関する学習会
24	富山県生協	商品・仲間・食活動委員会
25	CO・OPやま	食育(子ども・親子対象)
26	コープししかわ	2011年度食の安全・安心学習会
27	福井県民生協	食の安全
28	コープあいち	トマトの収穫・ケチャップづくり
29	コープぎふ	商品表示ウォッチャー養成講座
30	コープみえ	おしゃべりパーティ
31	コープしが	コープ倶楽部17箇所・地域委員会63会場
32	ならコープ	学習会
33	わかやま市民生協	見学バスツアー
34	京都生協	食と健康の取り組み
35	大阪いずみ市民生協	コープラボ見学
36	おおさかバルコープ	産地・工場見学
37	大阪よどがわ市民生協	み〜るクラブ
38	コープこうべ	食の安全学習会
39	おかやまコープ	産地交流・工場見学
40	おかやまコープ	ハッピー・フードパーク
41	生協ひろしま	産地・工場見学
42	鳥取県生協	コープの商品見学会
43	生協しまね	コープフェスティバル
44	コープやまぐち	食のかたりべ等による学習(コープ委員会企画)
45	コープかがわ	産直商品学習・交流
46	とくしま生協	産地工場見学
47	コープえひめ	産地見学
48	こうち生協	産地見学・工場見学
49	エフコープ	食の安全懇話会
50	コープさが	お魚講演会(佐賀北エリア)
51	ララコープ	食についての講習会
52	コープおおいち	食の安全学習会
53	コープみやざき	生産者交流学習会
54	生協水光社	親子田植え体験交流会
55	コープ熊本学校生協	食の安全学習会
56	コープかごしま	産直二者認証

取り組みの中で、多くの組合員の声が寄せられ、同時に多くの気づきがありました

《組合員の声》

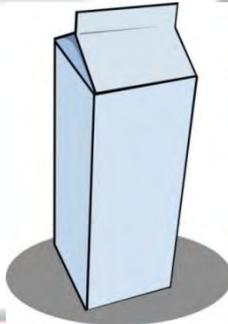
- GM作物への不安、飼料への不安
- 生産は続けてほしい
- 酪農家を守るためにできることは…
- コープ牛乳は生協のこだわり
- 低価格がいい



《気付いたこと》

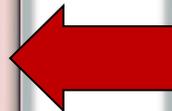
- GM作物に対しての不安の声と安全と判断しているという声があること
- 産地の現実…飼料高騰。資材高騰。利用の低下。乳価の下落
- 利用は産地を支えること
- 持続できる酪農を！わたしたちにできることがある
- 関係者それぞれに様々な思いがある
- 適正価格

遺伝子組換え飼料
を使っていない牛乳



《今後の課題》

- 場を増やす
- 参加者を増やす
- ファシリテーターの養成
- 情報提供の仕方
- 学習が必要
- リスクコミュニケーションの必要性と組合員の理解を深める



《成果・まとめ》

- ひとつのテーマについて関係する人たちがお互い情報交換しながらそれぞれの立場を認め合いながら意見を出し合えた
- たくさんの場でたくさんの思いを共有できた
- もっと牛乳を飲みましょう！の思いが強まる

リスクコミュニケーションの概念

食の安全に関わる リスクコミュニケーション

実生活における問題意識や体験等により人々が食品の安全性について自ら気づき、実感できる取り組み

リスクアナリシスに関わる リスクコミュニケーション

リスク評価

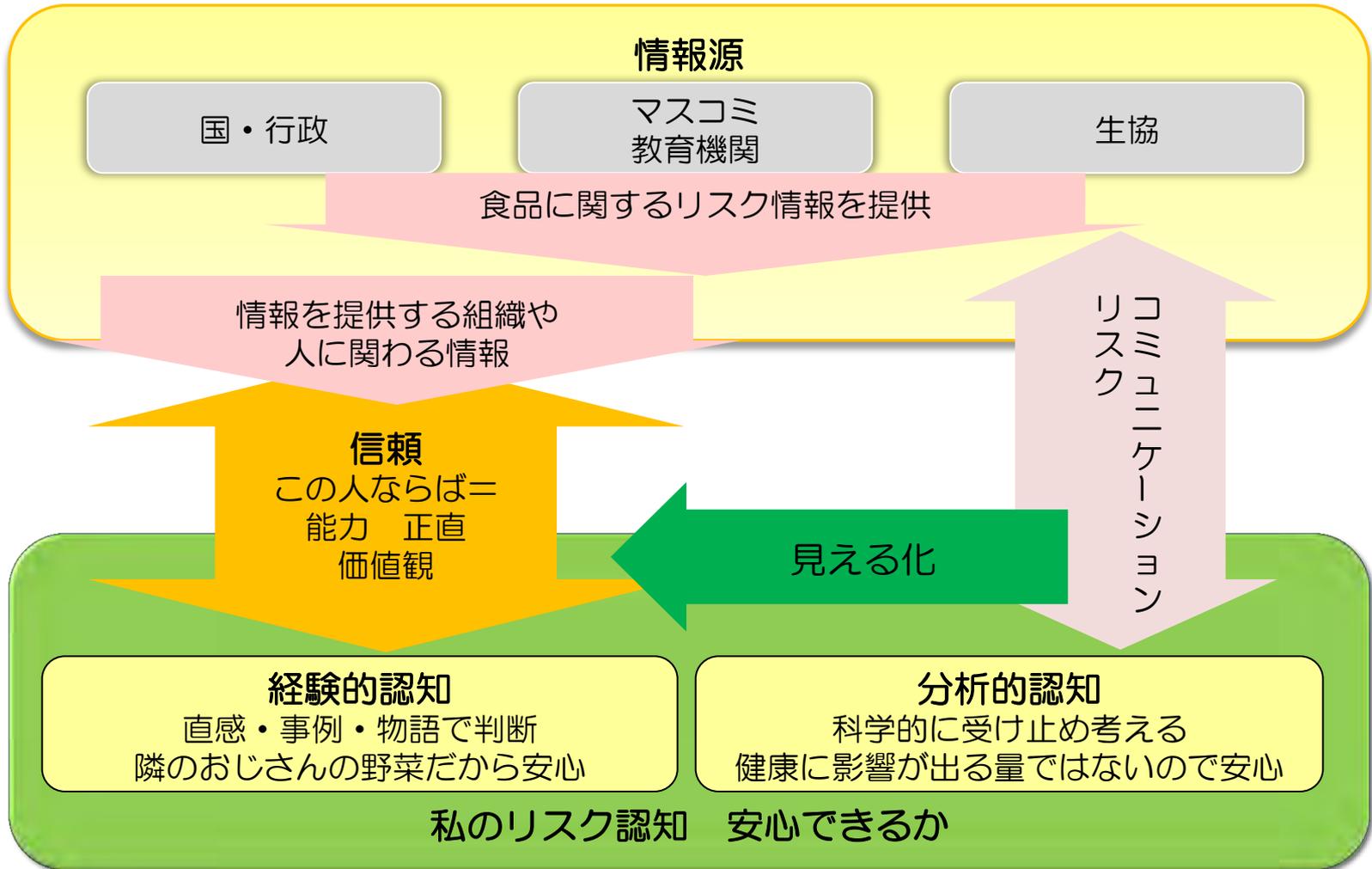
リスク管理

食や商品に関わる組合員活動や 日常の配達や売り場の中で行われる リスクコミュニケーション

実生活における問題意識や体験等により人々が食品の安全性について自ら気づき、実感できる取り組み

商品の安全に関わる政策や 基準の合意形成の中で行われる リスクコミュニケーション

安心とリスクコミュニケーション



《リスクコミュニケーションの現状について》

商品事業に関わるリスクコミュニケーションの強化

会員生協(単位生協・事業連合)	日本生協連
<ul style="list-style-type: none"> CO・OP商品に関わる政策や基準が整備され、組合員に公開されています。 商品事故や苦情など商品のリスクに関わる情報について情報を公開しています。 日々の組合員の「食の安全に関わる不安」に答えるため、職員に対する情報サポートを行っています。 商品事業に関わるリスクコミュニケーションについて、誰にどのような情報を提供するのか、機関運営の関わり方もふくめ体系化しています。 重要な商品政策の変更については地区総代会議での議論や、組合員も参加できるリスクコミュニケーションの場がもたれています。 	<ul style="list-style-type: none"> 会員生協と日本生協連のクライシス時のコミュニケーションを共有化するため、ポジションシートやコミュニケーションガイドラインを整理しました。 食品安全委員会などのリスク評価をもとに商品事業委員会や安全・品質小委員会で協議をし、商品政策や基準の見直しを行ってきました。 商品の表示の基準を作り、正確な情報提供をすすめてきました。 こうした基準や基準の変更について、会員生協のリスクコミュニケーションやその中で出された意見を受け止める、双方向性のコミュニケーション強化が必要です。

CO・OP商品の組合員参加とコミュニケーションのあり方に関する提言「2010年3月」より

組合員の不安に応えるリスクコミュニケーション

会員生協(単位生協・事業連合)

- 組合員とのオープンなリスクコミュニケーションの場が持たれています。
- 生協の産地見学や試食会など食に関わる多様な取り組みが、「自らの問題意識から出発して自らが気づく」場としてリスクコミュニケーションの基盤となっています。
- 広報誌などを通して、生協のリスクコミュニケーションの取り組みを情報提供しています。
- 生協の職員が毎日の仕事の中で行っている苦情対応や商品情報の提供もリスクコミュニケーションの基盤を作っています。

日本生協連

- 「食品のはてな?BOX」サイトを構築し、インターネットを活用した情報提供を始めました。
- CO・OP手作り餃子重大中毒事故を契機に、日本生協連の品質保証再構築計画の取り組みについて、各生協の総代に届けることをめざしたパンフレット等を作成し、情報提供を始めました。

社会的なリスクアナリシスの仕組みを強化する取り組み

会員生協(単位生協・事業連合)

- 都道府県の審議会などへの参加を進めています。
- 地域の消費者団体等と協同の取り組みを進めています。
- 出前講座や社会科研修など学校教育とのつながりを作っています。
- 地元のマスコミ各社と、日常的な交流の場を作っている生協もあります。

日本生協連

- パブリックコメントの提出や審議会への参加を進めています。
- 審議会に参加する組合員リーダーへの支援を行っています。
- 全国や地域で、消団連などの場を通じた他の消費者団体との協同の取り組みを進めています。
- 日本生協連では生活情報系の新聞記者に対し、「食の安全」に関わる情報提供を行っています。

(1)商品事業に関わるリスクコミュニケーションの強化

①品質基準やルールの変更に関わる合意形成

組合員とのコミュニケーション (単位生協・事業連合)

- 商品政策や基準の整備を進めること。
- 職員への情報提供と組合員への広報を進めること。
- 職員に対する適切な情報提供の仕組みを作り、実施すること。
- 組合員との合意形成のプロセスを設計し、リスクコミュニケーションの主体として進捗管理を行うこと。

組合員とのコミュニケーションのサポート (事業連合・日本生協連)

- 会員生協に対する情報提供のありかたや意見交換の場の設定についての考え方を整理し、職員や組合員に向けてわかりやすい情報提供を行うこと。
- 会員生協での組合員との合意形成のプロセスに協力し、双方向のリスクコミュニケーションをサポートすること。
- 会員生協のリスクコミュニケーションを行える人材育成をサポートすること。

②事故などクライシス時の情報提供の強化

組合員とのコミュニケーション (単位生協・事業連合)

- 広報や職員への情報提供を通して、組合員の不安に対応すること。
- クライシスマニュアルの運用と整備を進めること。
- 危機管理研修や演習を実施すること。
- 緊急時のお問い合わせ機能の強化を進めること。
- 日常から、地元マスコミ、行政との関係を強化し、クライシス時の正確な情報提供と緊密な連絡が行える基盤をつくること。

組合員とのコミュニケーションのサポート (事業連合・日本生協連)

- 会員生協と共同のクライシス基準や「コミュニケーションガイドライン」に基づく対応を進め、クライシス時の情報発信力を高めること。ガイドラインは適宜メンテナンスをすること。
- CO・OP商品はもちろん、食品安全に関わる社会的な事故・事件に際してわかりやすい情報を発信すること。また会員生協向けに総合的な情報提供ポータルサイトを整備し、必要な情報をタイムリーに提供すること。
- 危機管理研修や演習を会員生協とともに実施し、緊急時のお問い合わせ機能の強化を進めること。

(2)組合員の不安にこたえるリスクコミュニケーションの推進

毎日の消費者の「食品の不安」に、ともに悩み・応える場を広げます。「食品の安全」に関わる適切でない情報も多く流れる中、科学的な知見に基づく消費者への情報提供を強化し、双方向のリスクコミュニケーションを粘り強く進めることが大切です。

組合員とのコミュニケーション (単位生協・事業連合)

- 組合員の食品の不安に応える活動としてリスクコミュニケーションに取り組み、直接の活動に参加できない組合員に対しても、広報誌等で情報提供を行うこと。
- 産地や工場見学・商品学習などを通じて、安全・品質管理の実態を学べる機会を増やすこと。
- 科学的な知見に基づく情報提供ができるよう、職員に対して、わかりやすく「商品政策」や個別商品、添加物・農薬等の知識を学べるよう、学習を位置付けるとともに、日常的に組合員から聞かれる質問について対応できるようなサポートを強めること。

組合員とのコミュニケーションのサポート (事業連合・日本生協連)

- 各地の生協の、組合員の不安に応えるリスクコミュニケーションの取り組みについて交流を進め、コーディネートできる人材のサポートを進めること。
- 職員の日常的な苦情対応や問い合わせに応える力をサポートする情報提供を進めること。

(3)社会的なリスクアナリシスのしくみの強化

行政の行うリスクアナリシスの仕組みを強化するため、行政等のリスクコミュニケーションに積極的に参加し、必要に応じて消費者の視点から政策提言を行います。マスコミや他の消費者団体などとのつながりを強化することも重要です。

組合員とのコミュニケーション (単位生協・事業連合)

- 食品安全行政への消費者参加が進むよう、都道府県・市町村レベルの審議会などに積極的に参加すること。
- 都道府県・市町村の食品安全行政に関して、必要に応じて政策をまとめ提言すること。
- 地元マスコミや他の消費者団体とのつながりを強化し、リスクアナリシスへの理解を進める取り組みを行うこと。

組合員とのコミュニケーションのサポート (事業連合・日本生協連)

- 消費者庁のもとでの新しい食品安全行政の仕組みが、機能するよう必要に応じて政策提言を進めること。
- 食品安全行政の場への消費者の意見反映が進むよう、審議会等に参加すること。また、消費者の立場から提言できる、組合員リーダーへの情報提供や学習交流を行うこと。
- マスコミや他の消費者団体とのつながりを強化し、リスクアナリシスへの理解を進めること。

	単位生協の現場	単位生協本部・事業連合	日本生協連
職員	<ul style="list-style-type: none"> 組合員の声をきちんと受け止めることを大切にできる職員を育てる風土と職場運営を行うこと。 組合員の声で応えきれないで困っていることを出し合い、解決できる職場運営を行うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 組織として、双方向のコミュニケーションの状況を把握し、組織として課題化し現場に情報提供していくこと。 教育体系に、商品政策や品質管理など基本的な考え方を学び、職員のサポート力を高めるカリキュラムを入れ込むこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本生協連として、クイックプロをとおして組合員の声を把握し、必要な対策をうつこと。その内容が会員生協・職員・組合員リーダーまで伝わるコミュニケーションを進めること。 営業担当が会員生協で聴いてくる声や様々な会議で寄せられるご意見が組織全体に見えるようにすること。
組合員リーダー	<ul style="list-style-type: none"> 声が出しやすい雰囲気づくりなど、双方向の場をコーディネートするリーダーを育成すること。 活動の場面で寄せられる組合員の声を出し合い、解決できる運営を行うこと。 インターネットの双方向性を生かした双方向の場づくりを進めるコーディネーターを育成すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 組合員活動の場でだされる組合員の声について、組合員リーダーから聞き、事業として応える場をつくること。 組合員リーダーを対象とした商品政策や安全の考え方など基本的なことを学ぶ場をもつこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本生協連として、クイックプロをとおして組合員の声を把握し、必要な対策をうち、その内容が現場の職員・組合員リーダーまで伝わるコミュニケーションを進めること。 インターネット上の双方向の場の作り方について会員生協間での経験交流をすすめること。

CO・OP商品の組合員参加とコミュニケーションのあり方に関する提言「2010年3月」より

会員生協(単位生協・事業連合)

- 身近な店舗や商品カタログでの情報提供をさらに強化すること。
- 組合員のおすすめ情報や声から改善した事例などCO・OP商品への参加が見えるような情報提供を強化すること。
- 科学的知見に基づくわかりやすい情報提供や身近な不安に答えるQ&Aの情報提供をすること。
- 商品政策など、安全性は品質管理全体で担保されるという情報が不十分で、添加物基準のみが説明される傾向があるので、安全の伝え方や表記ルールを検討すること。
- 科学的な知見だけではなく、信頼を形成するためにフードチェーン全体に関わる仕事をする人に情報提供すること。

日本生協連

- CO・OP商品の共同化が進む中で、食品の安全の考え方やCO・OP商品の情報など現場が必要とする情報を日本生協連として会員生協に提供すること。
- 今回、調査した生協の中で、日本生協連の商品のページにリンクが設定されているのは1会員、「食品のはてな?BOX」のリンクは1会員であったことから、店舗や商品カタログもふくめ、コープ商品に関わるホームページや広報誌のコンテンツをつくり、活用してもらうこと。

	会員生協(単位生協・事業連合)	日本生協連
双方向	<ul style="list-style-type: none"> 日本生協連から提供された情報を使って、直接組合員に向かい合い、説明を行うという視点から、日本生協連のコミュニケーション計画や発行物について積極的に意見を言うこと。 様々な発行物に関する組合員の声を集め、日本生協連に伝えること。 	<ul style="list-style-type: none"> 会員生協における説明や意見交換の実態や出されている意見の意味を理解できるように、会員生協の様々な場に参加すること。 会員生協で起きていることや考えていることをまず聴き、そのことを理解した上で対応していくこと。 コミュニケーション計画や発行物について、会員生協と協議をし、意見を取り入れて製作すること。
見える化	<ul style="list-style-type: none"> 広報誌やホームページだけではなく、店舗や商品案内など事業をとおした見える化を進めること。 会員生協によって広報・組合員活動部・機関運営など広報機能や分担や連携のあり方が異なっていることや、事業連合と単位生協の広報機能の分担が一樣ではないことを考慮しつつ、役割と権限、ルールを明確にして、分散した機能が連携するような運営を行うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 会員生協から必要とされる情報をわかりやすく提供していくこと。 CO・OP商品政策や基準に関わり、会員生協で合意形成が必要な事項についてわかりやすい情報提供を行うこと。 ホームページや広報誌などのコンテンツについて共同利用を進めること。 企画機能の共同化が進む中で店舗や商品カタログの情報提供も強化すること。

国際的な食品の安全性確保 のためのコミュニケーション

2014年9月24日(水)

食品安全委員会

「第4回リスクコミュニケーション学習会」

日本生活協同組合連合会

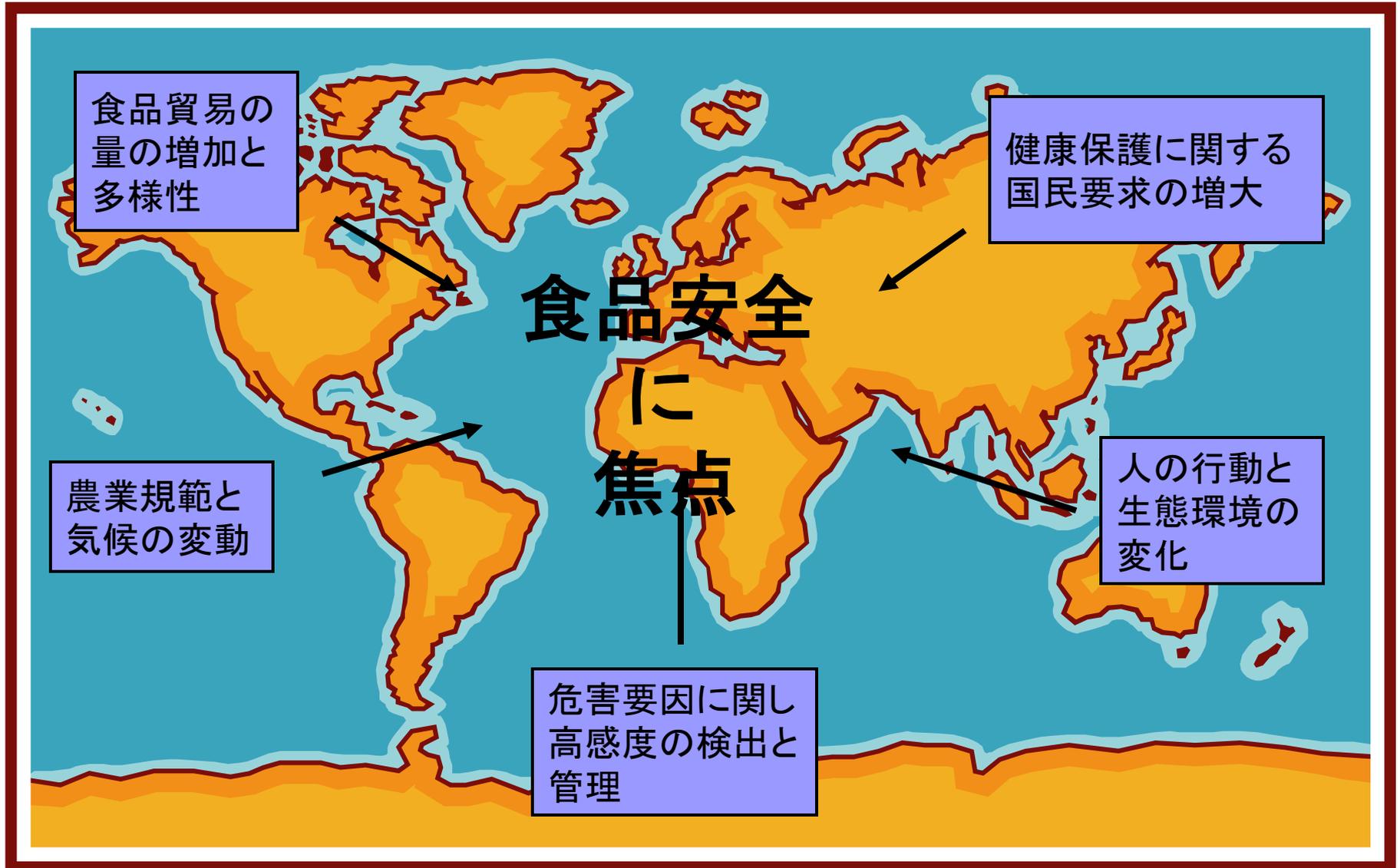
安全政策推進部

鬼武一夫





食品安全システムの変化を推進している要因





リスクアナリシス (リスク分析)





食品安全システムの特徴

従来のシステム

- ・受身的アプローチ
- ・主として政府が責任を持つ
- ・構造化されたリスクアナリシスを欠く
- ・最終製品の分析、試験に依存

リスク削減効果：必ずしも十分ではない。

新時代のシステム

- ・予防的アプローチ
- ・責任の共有
- ・生産者から消費者まで一貫してカバー（フードチェーン）
- ・科学的
- ・構造化されたリスクアナリシス
- ・優先順位を決める
- ・食品コントロールを一体化
- ・プロセスコントロールに依存

リスク削減効果：従来に比べ改善



リスクという言葉はどのように使われるか

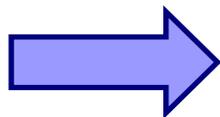
1. 「危険」を意味するカタカナ語
2. ビジネス分野で言う「リスク」
大きな利益を狙うために、あえて値上がり/値下がりの幅が大きいと予想される株に投資する
3. 健康・生命・環境問題の分野で言う「リスク」



リスクとは

- 将来起きるかもしれない損失（起きないかもしれない）、または損失や危害が起きる可能性
- リスクはあると考える（その大小がある）
- 日本語にはない概念

riskとdangerは使い分けられている



（やばさ加減）



ハザード(危害要因)とは

- 健康に悪影響をもたらす可能性を持つ食品中の生物学的、化学的または物理学的な物質・要因、またはそうした食品の状態
- 生産、製造中に使用されるもの、生産、製造、貯蔵流通中に機械、器具、接触物体や環境から汚染する物質など
→微生物、化学物質、放射能など



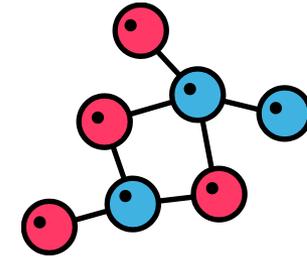
生物学的ハザード



- 細菌
- 毒素産出性の微生物
- かび
- 寄生虫
- ウイルス
- その他生物学的ハザード



化学的ハザード

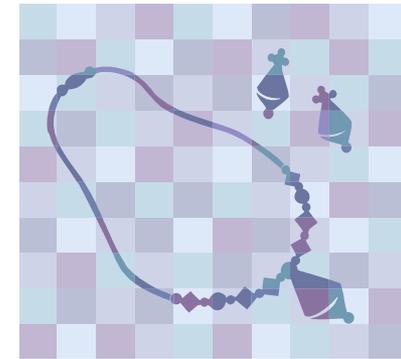


- 自然毒素
- 直接、間接添加物
- 残留農薬
- 残留動物用医薬品
- 化学物質による汚染



物理的ハザード

- 金属、けずり屑
- 工具
- ガラス
- 昆虫の一部
- 宝石類
- 石

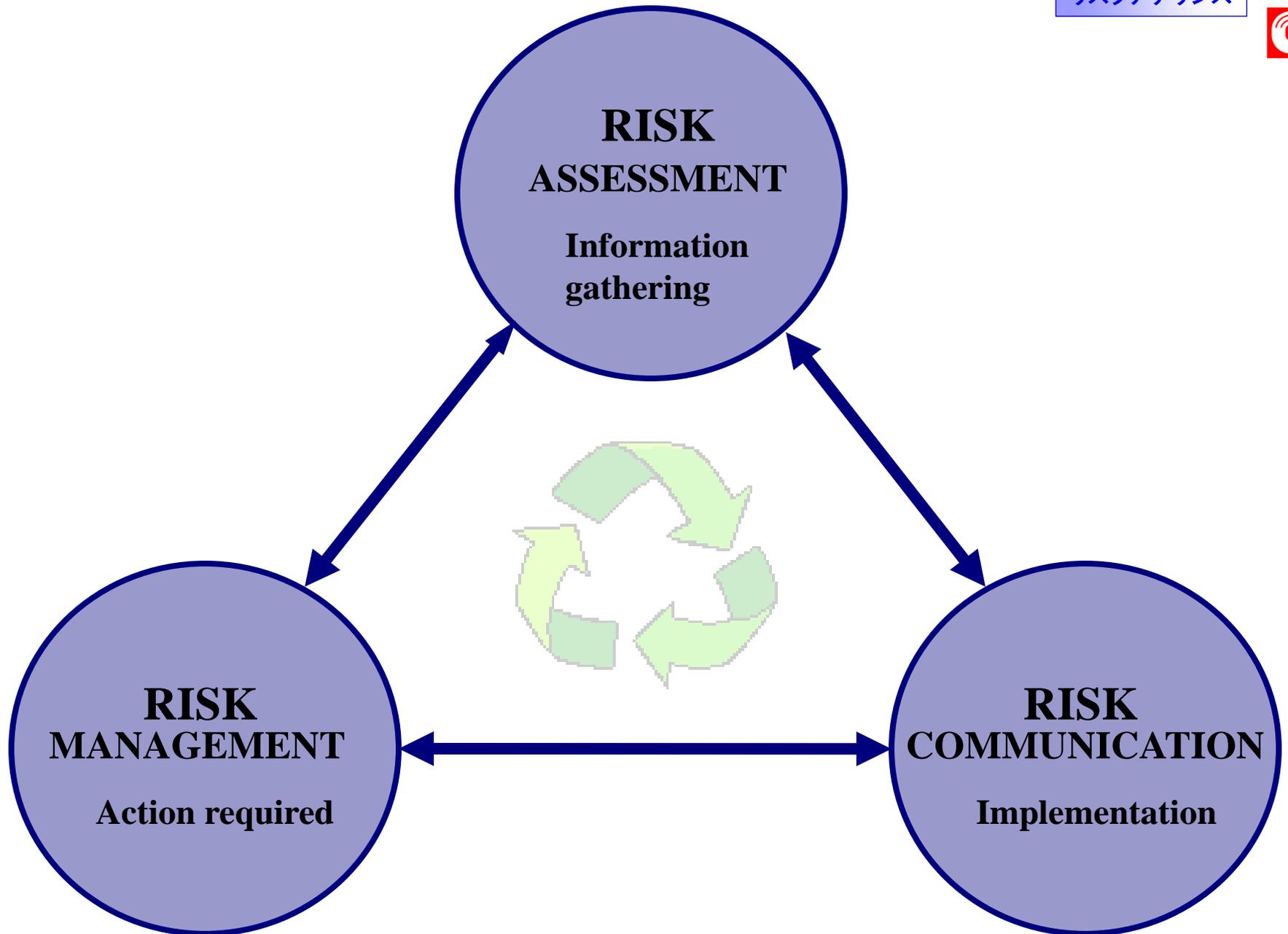




科学的な政策の導入

リスクアナリシス手法

- 食品を摂取することによって、健康に悪影響を及ぼす可能性をコントロールするための考え方や手続きの総称
- 食品の安全確保を考える際に、単純に「安全」・「危険」と二分するのではなく、科学的な根拠に立脚し、可能な範囲で食品事故を未然に防いだり、健康への悪影響の起こる確率や程度(リスク)を最小にする





リスクアナリシスの3要素

- リスク評価（リスクアセスメント）
- リスク管理（リスクマネジメント）
- リスクコミュニケーション



リスク管理の枠組み

Risk management framework

- 初期作業
- 政策・措置の評価
- 政策・措置の実施
- モニタリングと見直し



リスク評価の方法

Risk Assessment Methodology

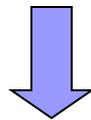
- ハザード同定 (Hazard identification)
- ハザード特性付け (Hazard Characterization)
- 暴露評価 (Exposure Assessment)
- リスク判定 (Risk Characterization)



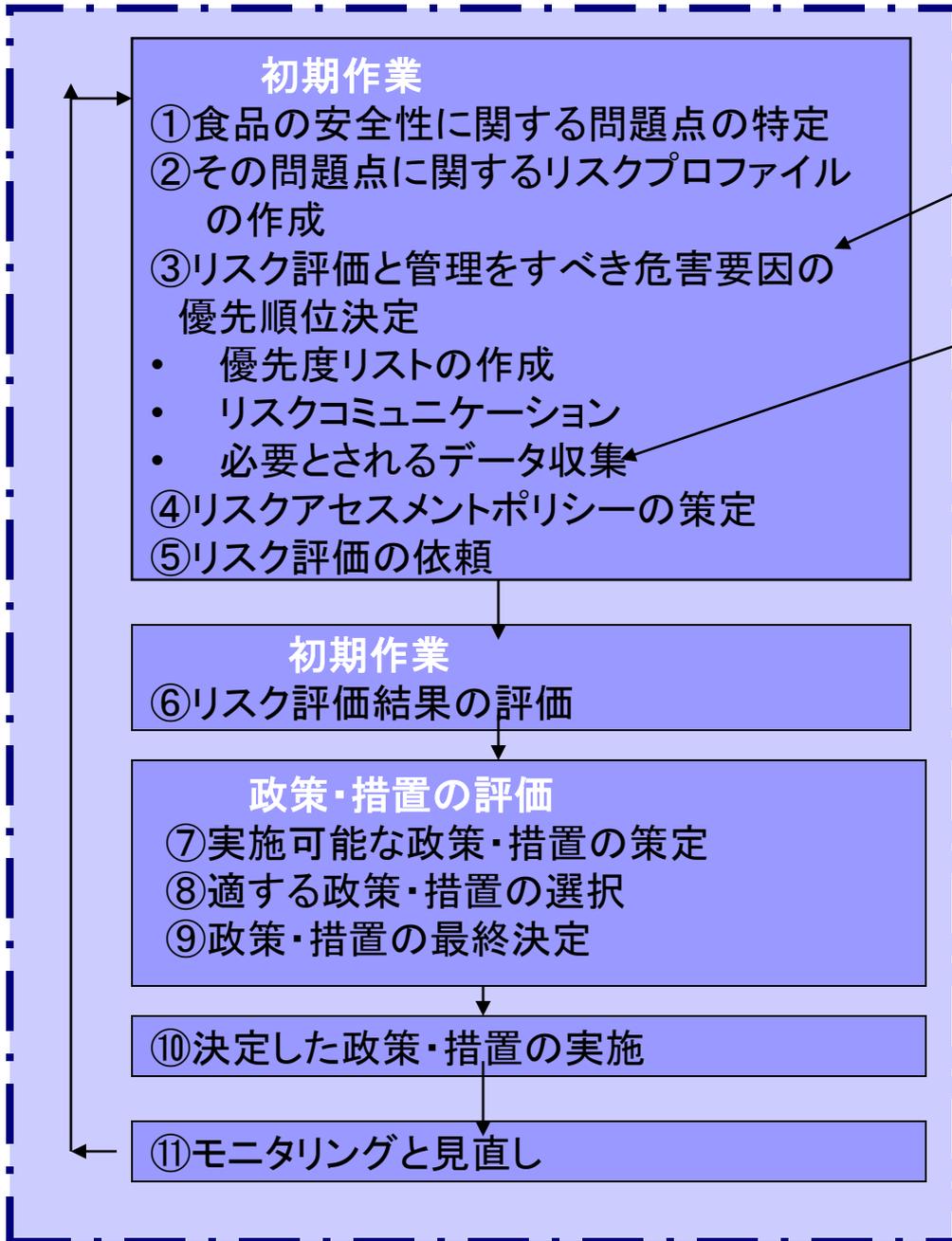
Risk Analysisで行うこと

■ Risk Management（初期作業）

- － 問題点の特定
- － ハザードの優先順位付け
- － リスク評価・方針の決定
- － リスク評価を依頼する



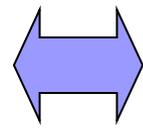
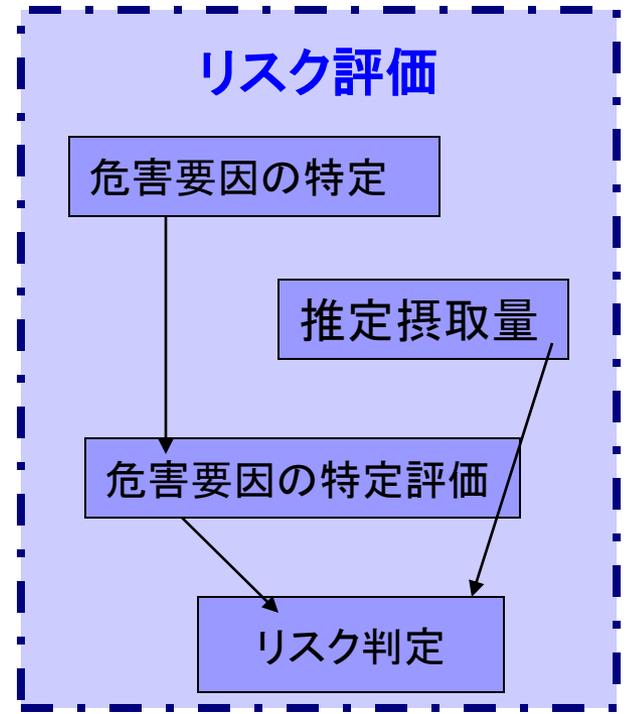
Risk Assessment



リスク管理

優先的にRMを行うべき物質の決定

サーベイランス・モニタリング



機能的分離と相互作用

リスクコミュニケーション



リスクコミュニケーション

- リスクコミュニケーションは非常に重要である。

しかし、

- しばしば、リスクアナリシスの要素として十分に活用されていない。



コーデックスにおけるリスクコミュニケーション

危害とリスク、リスクに関係する因子およびリスク認識に関して、リスク評価実施者、リスク管理実施者、消費者、産業界、学界およびその他の関係者の間の、リスク評価の所見についての説明およびリスク管理上の決定の基盤を含め、リスクアナリシスのプロセス全体を通じて情報および意見を**相互作用的**に交換すること。



食品安全基本法（第9条）

■ 消費者の役割

消費者は、食品の安全性確保に関する知識と理解を深めるとともに、食品の安全性に関する施策について意見を表明するように努めることによって、食品の安全性の確保に積極的な役割を果たすものとする。





リスクコミュニケーションの要点

- 相互作用的に交換させること。
- リスクには科学的側面と感情的側面
 - 専門家は科学的側面に重きを置く。
 - 一般は感情的側面により大きな懸念を持つ。
- RCは常に明確な目標の設定が必要
- RCはリスクアナリシスのできるだけ早い段階で有意義な形で、外部の利害関係者に積極的に関与してもらう。



リスクコミュニケーションの目標

- 関与する者全ての意識と理解の向上
- リスク管理の決定にあたり、より整合性、透明度の高いもの
- リスク管理の提案は、理解を深めるための健全な基盤を提供する。
- リスクアナリシスのプロセス全体の効果を高める
- 効果的情報及び教育プログラムの開発
- 食品の安全性に関して公衆の信頼感を育む
- 相互尊重を促進
- RCプロセスに利害団体すべてを参加させる
- 関係者の知識、態度、価値観、規範、認識などの情報交換



ステークホルダーの種類

- 農民、食品生産者
- 食品加工業者、製造業者、流通業者、その供給業者
- 食品卸売業者、小売業者
- 消費者
- 権利擁護団体(消費者、環境、宗教、その他のロビー組織など)
- 地域団体
- 公衆衛生団体、ヘルスケア業界
- 大学、調査機関
- 政府(地方政府、州規制当局、連邦規制当局、公選の役職者など)
- 地理的地域、文化、経済、民族グループの代表者
- 民間団体
- 企業
- 労働組合
- 業界団体
- マスコミ



ステークホルダーに参加してもらうための戦術例

■ 集会による方法

- 公聴会
- 公的集会
- 状況説明会
- 質疑応答
- タウンホール・ミーティング
- パネルディスカッション
- フォーカスグループ
- 研修会

■ 集会以外の方法

- 面談
- ホットライン、フリーダイヤル
- インターネットのホームページ
- 広告、チラシ
- テレビ、ラジオ
- 報告書、パンフレット、広報紙
- ブース、展示
- 競技会、イベント



リスクの認知に関する要素

リスクを感じやすい > リスクを感じにくい

- | | | |
|-------------|---|-----------|
| ● 情報が少ないもの | > | 情報が多いもの |
| ● 未知 or 新技術 | > | 既知技術 |
| ● 他人がコントロール | > | 自分がコントロール |
| ● 利益が不明 | > | 利益が明瞭 |
| ● 影響が不公平 | > | 影響が公平 |
| ● 合成物質 | > | 天然物質 |
| ● 子供への影響 | > | 大人への影響 |
| ● 破滅的 | > | 統計的 |



効果的なリスクコミュニケーションの要素(1)

■ リスクの性質

- ハザードの特徴と結果
- 規模と重大性
- 是正措置の緊急度
- 重大性の傾向(重要度が増加しているか、減少しているか)
- 分布と広がり
- リスクに晒される集団の性格と規模
- リスクの高いグループのプロファイル
- 曝露の確率。
- 重大なリスクをもたらす曝露量



効果的なリスクコミュニケーションの要素(2)

- 特定の行動や選択に関連するベネフィットの性質
 - 特定の行動や選択に関連する実際の、あるいは予想されるベネフィット
 - ベネフィットを受けるのは誰で、どのように受けるのか
 - リスクとベネフィットのバランス
 - ベネフィットの規模と重要性
 - 影響を受ける全集団に対するベネフィット合計



効果的なリスクコミュニケーションの要素(3)

■ リスク評価の不確実性

- リスク評価に用いられた方法
- 各不確実性の重要度
- 入手可能なデータの弱点、不正確な点
- 予測の基となる前提
- 予測の前提に対する感度
- 予測が変化した場合のリスク管理に関する決定への影響



効果的なリスクコミュニケーションの要素(4)

■ リスク管理の選択肢

- リスクを制御し、管理するために取られた行動
- 個人へのリスクを減らすために、当該個人の取ることができる行動
- 特定のリスク管理選択肢を選ぶ理由
- 特定のリスク管理選択肢の有効性
- 特定のリスク管理選択肢のベネフィット
- リスク管理のコスト。誰がコストを負担するのか、を含む
- リスク管理選択肢実施後の残余リスク



適切なリスクのための原則

1. 聴衆を知る
2. 科学的専門家を関与させる
3. コミュニケーションでの専門性確立
4. 情報源の信頼性
5. 責任を分かち合う
6. 科学と価値判断は異なる
7. 透明性を確保
8. リスクの認知





まとめ

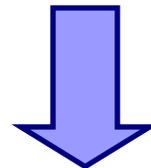




食品の安全性に関する問題

■ 複雑化

- ▶ 新興の食品媒介食中毒菌の出現
- ▶ 新しい化学物質(食添、農薬、動物薬等)や汚染物質の食品への残留・存在
- ▶ 新規の生物学的汚染
- ▶ BSE
- ▶ 薬剤耐性菌の出現
- ▶ 食品の放射能汚染
- ▶ モダンバイオテクノロジーによる新規食品
- ▶ その他



これまでの対応策ではなかなか対処できない



食品の安全性に関する問題

■ 国際化

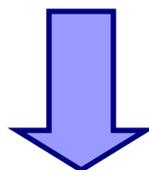
- ▶ 食品の国際貿易の増大（量と品目）
- ▶ ツーリズムによる海外渡航機会の増大など





食品の安全性確保

- グローバルな視点での食品の安全性の確保の重要性の認識



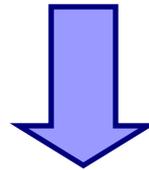
WHO, FAO, コーデックス等





食品の安全性確保

- グローバルな国際社会が協力した食品安全性対策の取り組み



- WHOの諸活動(薬剤耐性菌への取組み等)
- FAO (GAP等の推進)
- コーデックスの諸活動
(規格・勧告、適正規範、原則等の策定)

WHO: 世界保健機関

FAO: 国連食糧農業機関.



食品の安全性確保

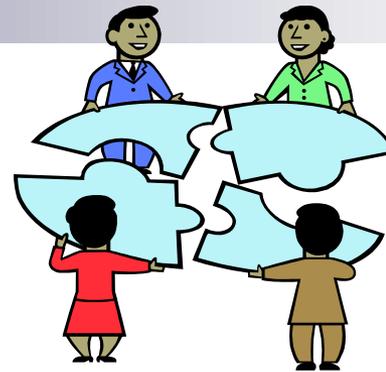
- 食品安全性を確保する枠組みとしてのリスク分析の国際的な確立とそれに基づく諸施策の実施（FAO、WHO、コーデックス等）



CODEX ALIMENTARIUS



FAO/WHO Food Standards - Normes Alimentaires FAO/OMS - Normas Alimentarias FAO/OMS



解決策

- 一国の政府だけでは諸問題を解決できない
- すべての利害関係者が参画することが重要とされた
- 行政による裁量ではなく、消費者の当然の権利としての意思決定プロセス(リスク評価、リスク管理)への参画が推進された(WHO、コーデックス、EU等)
- 専門家(行政を含む)から非専門家(消費者)への情報の伝達という旧来のリスクコミュニケーションから脱却すべき(FAO/WHO)という新しい概念に基づく、リスクアナリシスにおけるリスクコミュニケーションの役割と定義が確立



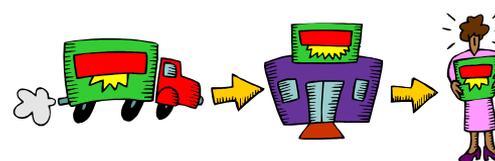
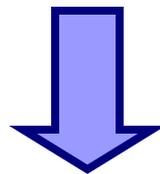
消費者が求めるもの





Conclusion

- 農場から食卓までの食品供給システム
(フードチェーンシステム)



このシステムに対する

- 一貫性
- 透明性
- 公開性

の点からの信頼感